純粋哲学の研究を医学の分野へ応用

国際関係・村上靖彦 助教授

7月にフランスで開かれた国際会議「レヴィナスとの一世紀　受け継がれるレヴィナス」に出席（左から2人目）

純粋な哲学と医学への応用という二つの分野の研究を手がけている。

フッサール（1859～1938年）が定式化した哲学の方法である現象学、とくにレヴィナス（1906～95年）の研究から出発したが、現在最も時間を費やしているのが自閉症の研究。

哲学とくに現象学は、本来人間の経験の構造を解明することを主要な目的としてきた。フッサール時代は「意識」という場で認識がどのように構成されるのかが問題になっていたわけである。しかしながら哲学者が内省によって捉えた構造は本当に普遍的な人間像であろうか。少なくとも、19世紀末以降の精神医学の発達によって、私たちは人間の経験には「精神疾患」と呼ばれる哲学が呈示する構造には収まらない経験のあり方があることを知っている。

さらに、20世紀半ば以降、今度は「発達障害」とくに自閉症と呼ばれる、精神疾患ではなく、先天的に経験の構造（脳の機能）が異なるために社会の中で様々な困難に直面している人たちの存在が明らかになってきた。

現象学から自閉症へ

医療現場で共同研究活動

論文執筆中気づく

親類のほとんどを収容所で失ったレヴィナスが、「人間が壊れる可能性」を哲学の構造の中に組み込んでいることに博士論文執筆の中で気がついた。

「壊れうるもの」という視点から出発し直したときに、人間の記述がどう変化するのか考えるために、自分の体の位置や運動を感じ取る、自分の感情を感じ取り、表情や身振りで表現する、といったことに困難を感じることがある。自閉症の人々を前にすると、逆に定型発達の人の経験の成立過程を問い直さなくてはいけなくなる、つまり哲学的な問いがここで惹起されるのである。

学会奨励賞を受賞

具体的には、例えば自閉症児が困難を感じ、ときに恐怖を感じる「目が合う」という経験の特異的な構造を、いままでの哲学は（サルトルなどの簡単なものをのぞいて）記述してこなかった。対人関係を主に他者の身体像の把握から考えていたからだ。この仕組みを現象学的に記述し直し、かつ自閉症児における「目が合わない」、「目が怖い」といった状態の成立構造をあわせて分析した論文で、本年度第1回の日本哲学会若手研究者奨励賞を受賞した。

フランスでの国際会議で発言する村上助教授

自閉症関連ではこれまでに、高機能の自閉症者の言語発達の仕組みを分析する論文などを発表し、現在は遊びの発達から、彼らの「自己」がどのように発達していくのか考える論文を準備中である。

これらの研究は、国立成育医療センター発達心理科で共同研究という形で行われている。臨床家にとっては、哲学的な思考が理論的なモデルの形成の役に立つと考えられているのである。おそらく哲学研究者が医療現場で治療者とともに活動している数少ない例であろう。脳神経学的なデータと哲学の思考をつきあわせることで、既存の研究とは「別の」自閉症像を呈示できないかと期待されている。

また哲学研究の分野では、レヴィナスの生誕百周年にあたることもあり、今年は海外で3回の発表を依頼され、また海外の雑誌で今年は3本の論文を発表している。「経験の構造は一つではない可能性がある。この幅と可能性を含む体系がつくれたら、今の哲学の風景が変わるはず。それが出来たら素晴らしいと思う」。自閉症の研究の先にある将来の抱負をこう語った。

プロフィル

村上　靖彦（むらかみ・やすひこ）平成5年東京大学教養学部卒、同修士課程、ブリュッセル自由大学哲学DEAを経て、12年にパリ第7大学で博士号取得（基礎精神病理学博士）。同年本学講師となり、16年から助教授。国立成育医療センター臨床研究員。18年日本哲学会若手研究者奨励賞受賞。日本哲学会、日本現象学会、日本自閉症スペクトラム学会など所属。東京都出身。36歳。

薬物使わず乗り物酔いを防ぐ研究

医・平柳要 助教授

専門用語では「動揺病」と呼ばれる車酔い、船酔い、飛行機酔いなどの「乗り物酔い」のメカニズムに基づいて、「酔い」が起きないようにする手立てを探っている。乗り物酔いの発症前に起きる特異的な生体反応を見つけ出し、その生体反応を抑えることで、結果的に乗り物酔いを起こしにくくすることが狙いだが、実験を通して乗り物酔いの自覚症状が現れる前に、副交感神経の活動に一定の変化が現れることを突き止めた。この変化を利用した乗り物酔い予防策の研究を精力的に進めている。

シミュレーション用のゴーグルを手に実験の模様を話す平柳助教授

乗り物酔い（船酔い）に関しての記述は紀元前から既にある。20世紀後半になると宇宙酔いが報告され始めるが、これまでのスペースシャトルなどでの経験で、宇宙酔いは滞在2～3日間でほとんど起こらなくなることが分かってきたため、宇宙ステーションなどでの長期滞在では重要な問題ではなくなってきた。

しかし、最近になって観光目的の短期宇宙旅行が現実味を帯びてくると、一般の宇宙酔いをいかに予防するかが脚光を浴びるようになった。

ゲームで船酔いも

一方、視覚（映像）を中心とした感覚情報を巧みに合成した環境空間をつくり出し、その環境空間の中に自分（利用者）がいると錯覚させるようなバーチャル環境がゲームなど遊技用システムに登場。シミュレーション、トレーニングなどの手段として産業、教育、芸術、医療、福祉などさまざまな分野での業務用システムにも普及し始めると、利用者にめまい、ふらつき、頭痛、冷や汗、悪心といった乗り物酔いに似た症状（バーチャルリアリティー酔い）を引き起こす問題も指摘されるようになってきた。

乗り物酔いが発症するメカニズムには、内耳にある前庭器（平衡感覚器）、眼球内部の視覚器、皮膚や深部の体性感覚器の働きに加え、主に中枢神経や自律神経などの神経系統が関与している。強くかかわっているのは自律神経で、意志の支配を受けず、通常は交感神経と副交感神経が互いにバランスよく活動しているが、感覚混乱でバランスが崩れると発症する。

発症抑える方策探る

宇宙酔いの研究きっかけに

副交感神経の活動を利用

予防薬に副作用が

乗り物酔いは、一般的に女性の方が男性の約2倍発症しやすく、年齢別では12～15歳で最も起こしやすいというデータがある。対処策として、現状では抗ヒスタミン剤や副交感神経遮断剤、中枢神経興奮剤を含んだ薬がよく用いられる。

しかし、抗ヒスタミン剤は、悪心やおう吐を抑制する反面、副作用として眠気、だるさ、注意力の低下、パフォーマンスの低下などをもたらす。副交感神経遮断剤も眠気、健忘などを催し、中枢神経興奮剤も、食欲不振、不眠、心拍急速化をもたらすなど深刻な副作用が指摘されている。

2001年、マサチューセッツ工科大での研究の際に訪れたボストン郊外の漁港で

「私の研究・実験は、乗り物酔いの症状が起こる前に生体の中でどんな反応が起きているのかを突き止め、『薬』ではないもので、酔いの発症を抑える方策を探し出すことです」

マサチューセッツ工科大の客員研究員時代に研究者スタッフらと「一般人の宇宙観光旅行時代」に向けた宇宙酔い研究の必要性を話し合ったのがきっかけで、本格的な乗り物酔い研究に乗り出した。

短期宇宙旅行の推進、シミュレーターやバーチャル環境システムの開発など、今後の課題については「マシンシステム面だけでなく、ヒューマンシステム面でも利用者が乗り物酔いにかからないように、その生体環境をうまい具合に仕向ける方策を見いだすことが、これからの研究の重要なテーマ。何事もエビデンスに基づく早めの予防が大切です」と話している。

プロフィル

平柳　要（ひらやなぎ・かなめ）東京大学医学部大学院（疫学・医学部衛生学の講師を経て助教授。その間、パルマ大学（生理研）、マサチューセッツ工科大学（健康科学技術研）で客員研究員。専門は予防医学と環境医学。日本宇宙航空環境医学会や日本臨床高気圧酸素・潜水医学会、日本人間工学会の理事などを務める。医学博士。群馬県出身。54歳。